

補助講演②

人類学と「多様なもの」

龍谷大学社会学部・准教授 里山学研究センター・研究員

椿原 敦子

【要旨】

本発表では近年の環境政策における文化人類学への期待をふまえて、「人新世」に関する人類学的研究にはどのようなものがあるのか、また文化人類学は「多様性」に関してどのようなアプローチを採ってきたかを検討した。

ChuaとFair（2019）によれば、人新世に関する人類学的研究は主に4つの観点から行われてきた。第一に、人新世を民族誌的な問いの「背景」とするものである（例：気候変動の経験・理解や、科学知・在来知の民族誌）。第二に、「人新世」概念の構築過程を解明する科学技術研究の立場である。（例：カーボン、保全、持続可能性など人新世に関連する概念の生成と普遍化のプロセス、特定の場所・集団へのステレオタイプ形成）。第三に、人新世概念の登場に伴う既存のカテゴリーの再検討を行う研究である（例：自然／文化、人間／非人間という二項対立の再検討、マルチスピーシーズ研究）。第四に、人新世を人類の歴史的な文脈で再検討する研究である（例：人類の営み、人間観、資本主義の帰結としての人新世理解）。中でもChuaとFairは第三のアプローチに、人類学者と科学者、アーティストなど多様な人々の協働の可能性を見ている。

1990年代以降の文化人類学は、多様性の「多」を切り分ける権力性を批判的に検討してきた。すなわち誰が、何をひとつのまとまりとして扱い、そのまとまりの多様性をどのように調停するのかという問題に取り組んできたのである。こうした一連の研究は、以下のことを明らかにした。第一に、異なる知の体系間の翻訳・協働についての方法論の提示である（例：アクター・ネットワーク・セオリー、マルチスピーシーズ、マルチサイテッド）。第二に、第一の方法論を受けて、文化人類学は文化の記述ではなく、「記述の文化」（＝民族誌、文化人類学の文化的営為）を精緻化させてきた。第三に、多様性の「多」は要素の数に還元されるものではないという立場から、観点・方法・実践の複数性がある事象をいかに成り立たせるのかを明らかにする方法を提示してきた（例：ポストプルーラル論）。

本発表では、以上のような人類学における人新世・多様性研究の方法を用いた代表的な民族誌としてアナ・チンによる『マツタケ』（2019 [2015]）の記述を紹介した上で、すでに類似の視点が鶴見義行『バナナと日本人』（1982）にも見られることを指摘した。